

都留文科大学報

第123号

2013年
12月12日(木)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内
☎0554-43-4341 URL: <http://www.tsuru.ac.jp/>



第40回鶴鷹祭



学長と鍋ろう



夏季オープンキャンパス(学科別相談会)



パプアニューギニア大学学生との交流

特集 地域交流研究センター設立10周年・2

地域交流研究センター創設のころ 森 博俊
10周年を迎えた地域交流研究センター 杉本光司

学外研究報告6

初等教育科教授 春日作太郎
比較文化学科教授 鳥居明雄

夏季休業を利用して学外で学ぶ 8

初等教育学科教授 中井 均／3年 渡辺詩乃
国文学科准教授 加藤敦子／3年 佐々木あやめ
英文学科教授 西出公之／3年 伊志嶺明子
社会学科教授 前田昭彦／3年 松尾知香
比較文化学科准教授 山本芳美

教育実習を終えて(報告) 13

初等教育学科 3年 岩下翔平
国文学科 3年 遠藤桂花
英文学科 4年 阪本 遵
社会学科 4年 金子明弘

講演会だより 17

初等教育学科
英文学科

文大だより 19

都留文科大学合唱団 5年連続で全国大会金賞
第3回つる白熱教室
陸上競技部沖田真理子選手が全国大会で優勝
日本選手権リレー大会で入賞
第40回鶴鷹祭開催
夏季オープンキャンパス報告
秋季オープンキャンパス報告
前期修了者卒業式
第58回 桂川祭開催
現職教員教育講座
教員免許状更新講習
県民コミュニティーカレッジ講座
市民公開講座
パプアニューギニア大学学生との交流会開催！
編集後記 広報という仕事
本 ぶんだい堂

地域交流研究センター創設のころ

初代地域交流研究センター次長・二代目地域交流研究センター長 森 博俊

地域交流研究センターの創設には、「つる」という地域に生まれ育った本学が、どのような自己アイデンティティを求めていくのかという大きな背景的な問題がありました。今世紀に入るころ、教員養成を中心とする歴史的な蓄積と、新しい現代的課題に応えるための研究・教育のあり方を探る必要があると考えられていたのです。その一つが「地域の大学」という方向を深めることであり、当時は社会科学から「フィールド・ミュージアム構想」が、また初等教育学科からは臨床教育学を軸に据えた大学院設置に接続する「地域に根ざす教師教育」構想が提案されていました。

しかし、これらの背景が「センター創設」に至るには様々な

難問がありましたし、創設後も歩きながら新しい活動をつくり、多くの課題に対処せねばなりませんでした。思い起こせば、そこにはセンターを特徴づける契機となった大切な問題があったように思います。

その一つは、「地域交流」といっても、結局は大学に「地域貢献」を強いることになるのではないかという問題です。これも大切な役割ですが、そもそも大学は研究活動や学生を育て社会に送り出すことで社会貢献するのが基本だという考えです。またもう一つは、研究は本来普遍性を追求するのに、なぜあえて地域性にこだわるのかという問題でした。

前者は、学科を越えた新しい研究・教育の「かたち」をセンターから発信するという役割を確認し、大学の「地域サービス」活動に矮小化しないように努めてきました。大学やその構成員が蓄積している資源や専門性を活かして住民の活動や行政、学校等の地域の要請に応えることは大切にしつつも、本学にふさわしいセンター独自の地域交流を積極的に創造することにこだわってきたといってよいでしょう。したがって、問題はセンターを軸に展開する活動の内



容、つまり後者の課題である「地域」にこだわった研究・教育活動をどう展望するのかにありました。この点でまずは、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと仕事部門」という3部門を位置づけ、恒常的に活動を蓄積しながら本学センターの独自の特色を構築していこうと考えました。

地域に赴き、地域の人々と共同で、地域の課題と向き合い、そのような活動のなかから研究・教育の新しいあり方を探るというのはどういうことなのでしょう。すぐに答えのではありませんが、10年のセンター活動は地道に深めてきたことと思います。

創設当時、私たちは地域を「人々が生まれ育ち、自然とかわりながら暮らし、文化と歴史を刻みつづけている現場」(センターリーフレット『地域と大学をつなぐ』より)ととらえていました。そして、そこは同時に、現代社会の抱える矛盾が集積し現れる場でもあります。山積する課題が想定されましたが、とりあえず「よちよち歩きの」限られたセンターの力がかかわ



地域交流センター通信第1号

ることのできる問題を見定めながら、「出会いと交流と協働」を大切に活動を探求してきました。たとえば、フィールド・ミュージアムでは「自然との共生」が課題になりますが、このためには自然の息づく現場で生きものと出会い「交流」すること、この自然と地域の人々がつきあい生きてきた歴史、蓄えてきた知恵と文化に学ぶことが不可欠であると考え、このような観点を深めながら「フィールド・ミュージアム」を構想し展開してきました。また、発達援助活動の一環として開始したSATでは、地域の人々や家族のなかで暮らし、育つ子どもの「現実」を深く理解し、教師や保護者と協働して成長・発達を支えることを目指して活動を創ってきました。

現場性・当事者性・共同性に着目した活動は、多少の違いはあるにしても、大学の専門的研究とも内接し、既成の学問をとらえ直し深めるために積極的な意味があると思いました。そし

て、これらの活動への学生の適切な参加は、学生自身の問題意識の深化と結合した研究関心を育て、学問と実践に対する構えを備えた専門性の担い手を育てることにもつながるのではないかと考えていました。今日どの分野でも、学生が「実践的力量」を備えて社会に移行することが求められて

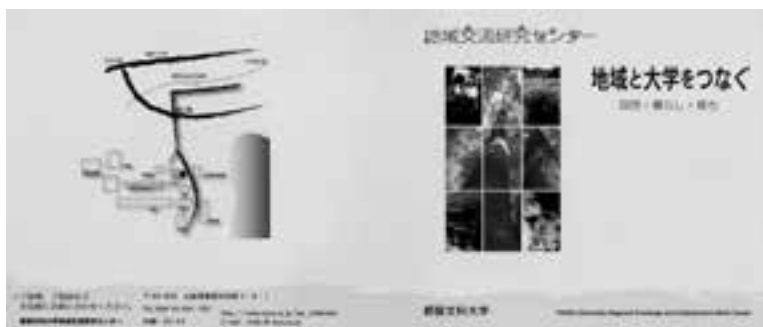
います。このような動向にたんに「スキル習得」面から対応するのみではなく、学生の内的な問題意識の育ちと結びついた実践性を志向していたといえると思います。

地域（現場）にとっても、大学（研究）にとっても、そして学生（学び）にとっても、積極



地域交流センター通信第6号より挿絵 絵：成瀬洋平

的な役割を果たしていきたいと考えていました。地域交流研究センターの創設は、大学のキャンパスを地域にひろげることにより、文字通り「地域の大学」となって新しい研究・教育の芽を育てようとした小さな試みだったと感じています。



センターリーフレット
『地域と大学をつなぐ』



10周年を迎えた地域交流研究センター

地域交流研究センター長 杉本光司

地域交流研究センターの創設（平成15年：2003年）から10年という時が流れました。設立当初から開始された部門活動においても、この10年の間、新たな取組みやメンバーも加わり、更に幅広い分野において活動を継続しています。

最近、大学の役割とか責務とは、教育・研究・社会貢献であるということを耳にします。2013年3月には、文部科学省による、新規事業「地（知）の拠点整備事業」（COC：Center Of Community）計画が発表されました。これまで地域交流研究センターにおいて実践してきた多彩な取組みや活動実績は、地域をフィールドとした研究活動をとおして得た成果を教育に活かし、そして地域に還元するという目標を掲げて活動が続けており、今回のCOC事業の趣旨とは、まさに本センター活動における趣旨そのものであると確信しました。また、2007年度に

採択された「特色GP」「現代GP」の2件の実践は、その後のセンターにおける部門活動の柱として、変わらず進化を続けており、改めて、地域交流研究センターにおける一つひとつの活動に対する注目が高まっています。

現在のセンターにおける各部門活動や地域と関わる多彩な活動を紹介します。

- (1) フィールド・ミュージアム部門（『都留市』全体が自然博物館）
 - ・生きものの生態調査、「フィールド・ノート」の発行、図書館、博物館、駅との連携による展示
 - ・学校との連携による講座開催
 - ・キャンパス内に住むムササビライブカメラ放映
 - ・地域に残る写真等のデジタル・アーカイブ化
 - ・標本などの資料を理科教材として貸出し
- (2) 発達援助部門（義務教育期



における子どもたちの成長・発達を援助する活動)

- ・SAT (Students Assistant Teachers: 学生アシスタント・ティーチャー) 活動
- ・教育相談（教育委員会・学校との連携）
- ・情報教育（小中学校を結んだ交流活動、情報教育研究会への参加）
- ・美術教育（小中学校教員との教育研究会、行政と連携したワークショップの実施）
- (3) 暮らしと仕事部門（農業・林業を通じた地域との連携）
 - ・学生の農業系クラブと地域を結ぶ
 - ・地域の山林調査を通じた実践、研究
 - ・暮らしに関わる講演会
- (4) 地域課題の解決に向けた活動
 - ・地域交流研究フォーラム、現職教員教育講座、市民公開講座、県民コミュニティカレッジ、文大名画座の開催
 - ・「地域交流センター通信」の発行
 - ・山梨県地域教育フォーラム南都留集会への支援
 - ・教育委員会との連携による「都留市子ども支援事業」へ



地域交流センター通信

の協力

- ・社会福祉協議会との連携による、学生と市民をつなぐ「ボランティアひろば」の開催
- ・学生が主体となった、18歳以上の知的障がい者の余暇支援事業として「いこいのひろば」の開催

(5) 地域を知る教養教育講座の開催（全国から来た学生が地域を知る講座を開講）

- ・『地域交流研究Ⅱ』『地域の自然・人を知り、伝える』
- ・『地域交流研究Ⅲ』『山梨学』（山梨県観光カレッジ事業と連携）
- ・『地域交流研究Ⅳ』『地域の生きものの地図の作成』

(6) 地域をフィールドとした研究プロジェクトへの支援

- ・谷二ラボ（谷村第二小学校における放課後科学実験教室の実施）
- ・田んぼクラブ（稲作体験活動の取り組み）
- ・都留市民の食習慣研究と特産物を利用した商品の研究

このような様々な活動を通して地域と関わりを持つ地域交流研究センターですが、センターにおける年間最大行事である「地域交流研究フォーラム」において、これまで開催されてきました、それぞれのテーマを列挙しますと、2004年度：「2年間の事業報告を中心に」、2005年度：「『地域の教育力』とは何か」、2006年度：「地域にとって大学とは何か」、2007年度：「つなぐはぐくむフィールド・ミュージアム」、2008年度：「フィールド・ミュージアムへようこそ!」、2009年度：「山・里・町をつなぐフィールド・



平成24年度フォーラム

ミュージアム」、2010年度：「『ボランティア』の力が地域を変える！（共催：都留市社会福祉協議会）」、2011年度：「大田堯先生とともに考える“生きる”こと、“学ぶ”こと、そして未来へ……（後援：山梨県富士・東部教育事務所）」、2012年度：「フィールド・ノート10周年からみえる未来」、となっています。

これらの言葉の中には、「地域」をフィールドとして「教育」をテーマに「研究」している教員とともに、それらの実践活動を力強く支えている多くの学生や地域に生きる人々の思いが生き続けており、しっかりと

地域志向を意識した活動の中で地域貢献活動と取り組んでいる力強い信念が感じられます。

地域貢献活動においても、恒例的な取組みに対する参加・支援は当然のごとく継続され、更に、新たに連携する組織や機関も増えており、2013年度には「都留市まちづくり交流センター」内に本センターのサテライトを設置しました。これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが実り、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認しています。



フィールドノート（平成24年度フォーラムにて）

学外研究報告



初等教育科教授

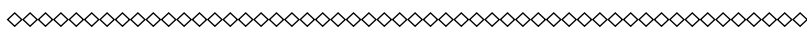
春日作太郎

私は、半年間、東京電気大学の臨床心理学ご専門の山口正二教授の研究生として学問のみならず学会運営や人生後半の諸事についてまでご指導を頂きながら、色々な保育園や施設でフィールドワークをさせて頂いたり、ハンディの有る人や老人・子ども達と即興ダンスや版画などの表現活動を体験してきました。

丁度今年は、山口先生がカウンセリング学会の大会準備委員長でいらした関係で、私も準備委員としてお手伝いをさせて頂きました。慌ただしいうちに終わりましたが、これは、色々な大学の先生が学会の活動で価値を置きエネルギーを使っている事と自分のそれとの対比の中で、私が「要らない」と思うものと「大切」と思うものをハッキリ自覚する良い機会となり、落ちついた自信が湧きました。

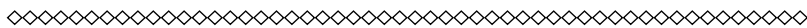
また、その2週間後に行われた人間性心理学会でも、「その場で短時間のカウンセリングを行いそこに居る人たち皆で議論する企画」を開きに行ったところ、相談を持ちかける人の役を大勢の人の面前で演ずるという大役を突然担わされ、その後の議論のなかで私の感想が多くの実践的研究者からいたく関心される結果に偶然なりました。これは私には思いもかけぬことで「へー……おれの指摘することが通じる人もこんなに居るんだ」と驚くような経験でした。

一方、演じている途中から、相談を受ける役の男性から善良な在り方が伝わってきて、「いい人だな」という思いが終了後



表現カウンセリング

—人と人との出会いのなかで再確認する旅—



も続きました。

このことは、各人のアピールや実務が優先される学会の場であっても、また意見や流儀は私とは一緒には成らない人であっても、こんなに「いい人」がいっぱい居たり、目前にある現象のことをそのままポツと言ってそれをそのまま素直にやり取りできる人達が居て相互に尊重される場が成り立ち得ることを再確認させられた出来事でした。これら、「仲間」や「空気」から独立して「事実」を見れる「個人」とのやり取りの中でも、自分の立ち位置の確認に繋がったかも知れません。

また、違った障害を持つ人達やスタッフと表現活動をとに行う際にそのために話し合う機会が何回も有りましたが、やり取りのなかで余計な加工や雑物が混入しない真ん中のことだけがぼんと語られお互いの間で交わされるような、当たり前で爽やかな場が静かに成り立つ体験を幾つもしました。

これと同じように、施設や保育園へ行った際目にした、そこで働く人達のシンドさがありながら、同僚や入居者あるいは園児との間の極々日常的なやり取りの中にふと交わされる笑みの様の中にも、小さな喜びの光の様な光景も、また大切なものは何かを再確認させてくれました。

上記のことは、やはり昨年から通い直し始めた池田潤子先生（野口三千三の一番弟子）の体操教室での、各人が自分のからだに今起きている事実を簡単な動きなどを通して素直に追及していく静かで深い集中の場の中でお互い支えられる体験が有っ

みんなのアートワークショップ
小串(2011)より

てこそその体験だと思っています。これは最近授業中にふと感じる力みなく体軸を感じて立っている感覚とその時の学生のやわらかな表情にも繋がっています。

とにかくこの半年でとても沢山の人と交流し、素敵な人達と出会い、素直に真ん中のことだけがずっと交わされる清らかな場が持てたことが、自分の「今」やブレてはならない「立脚点」を明らかにする何よりのものでした。

この原稿を見直している今日は、台風一過。駅へ向かって早足で家を出ると歩くほどに、幼児のゴム長・姫リングの輝き・枝先の小鳥…がひんやり澄んだ空間の広がりと共に感じられ、「世界は可愛らしいものに溢れている」と浮かんた。たあいの無い話だが、今日になってもこんなことを浮かばせてくれる6ヶ月間と、それを与えてくれた皆さんに感謝いたします。



ミュージカンパニー2013パンフより

学外研究報告



比較文化学科教授

鳥居明雄

〈対象を表象し、認識できる〉とする〈知〉を前にして、その不能を指摘し、これに向けて〈非知〉を唱えたあるフランスの現代思想家がいる。同じように、我が国のある作家はすでに昭和9年の時点でこの趣旨に近いことを次のように記している。その主は、他ならぬ谷崎潤一郎である。

「言語は非常に便利なもの
ありますが、しかし人間が心
に思っていることなら何でも言語
で現せる、言語でもって表白出
来ない思想や感情はない、とい
う風に考えたら間違いでありま
す」「返す返すも言語は万能な
ものではないこと、その働きは
不自由であり、時には有害なも
のであることを、忘れてはなら
ないのであります」

これは、谷崎の『文章読本』からの一節である。拾い出せばきりがなほどの啓示に富む宝庫からのほんのひとかけらではあるが、説くところは簡潔平明にしてまことに示唆深いといわざるをえない。そもそもこの『文章読本』は、『吉野葛』や『蘆刈』のみならず谷崎の文業全体へのみごとな自註としてあるのだが、その収まるところの究極は〈語り〉ということに尽きる、と断言できよう。先の引用でも一目瞭然、『文章読本』の文体自体からして、口語体で貫き通されている。みごとな姿

〈非文字〉の祈りといのち

—人間国宝認定の前田昭博さんに寄せて—

勢である。この姿勢と実践こそが要諦ということになる。つまり、谷崎がこだわりぬいている核心は、話し言葉、いわゆる〈語り〉ということになる。

谷崎が警戒する言語とは、狭義に言えば〈文字〉としてのそれである。他方、〈非文字〉としての〈語り〉の言語は、その警戒域からいささか許されるものであると認識されよう。音声による伝達や表出こそが、言語にまわりついている「分析」「合理」「整合」といった〈近代〉と対峙できる橋頭堡と意識されてのことである。

〈非文字〉。ここであえて、〈非文字〉とすることには、それなりの理由があることである。たとえば通有の〈無文字〉といえ、民俗学や文化人類学の占有領域になるが、〈文字〉に対して〈無文字〉で抗することはいささかの硬直を招きかねず、躊躇を覚える。そこで、〈非文字〉ということになる。冒頭の〈非知〉にならうのである。

さて、この〈非文字〉の領域を広げれば、〈語り〉の世界を超え出て、演劇や身体表現の世界に連なることになるだろう。さらには、手わざや手仕事としての工芸へも拡張されうる。この手仕事の領域への拡張を思うとき、これは拡散などというものでは断じてなく、むしろまったく逆であって、より確かな、より強くある〈非文字〉の凝縮態とし

てあらためて認識されてくる。
そして、その凝縮とますますの
強度の核心にあるものこそ、
〈非文字〉としての〈祈り〉で
あり、〈非文字〉としての〈い
のち〉であるとあえて言い切っ
ておきたい。

ここで、この9月、今年新たに重要無形文化財（人間国宝）に認定された陶芸家前田昭博さんの白瓷制作の営みに強く思い至るばかりである。独り仕事として築きあげられる独自の〈いのち〉への想い、〈祈り〉の営み。これが前田さんの無形の財としての核心であろう。すべて独り手仕事として成されるその器物、その器物が発する〈静けさ〉、微妙な陰影による静謐な動きとしての〈祈り〉、そのままに〈祈り〉としての〈いのち〉、〈いのち〉としての〈祈り〉。ここに集約される前田さんの営みにこめられている〈非文字〉の情動こそ、わたしたちの真の営みであり、真の願わしさであると、惻惻と胸に迫りくるのである。



前田昭博 作「白瓷壺」

夏季休業を利用して学外で学ぶ

東日本大震災の被災地で学ぶ



初等教育学科教授

中井 均

自然環境科学系地学ゼミでは毎年の夏休みを利用して、学生

がいったことがない地域を選んで見学旅行を実施している。今年は宮城県を中心に2泊3日で行なった。初日は蔵王火山、二日目は塩竈・松島から牡鹿半島、最終日は牡鹿半島から南三陸町の海岸部を見学した。二日目後半から三日目の地域は東日本大震災で大きな被害を受けた地域でもある。大震災から2年がた

ち、人口の多い都市部では復興が進んできたとはいえ、過疎地の続く南三陸沿岸部の復興は遅々として進んでいない。ニュースとなることが少なくなりややもすると忘れられがちになる東日本大震災のことを、今回の見学旅行は、学生諸君にもう一度考える機会を与えてくれたものと思う。

3年目の被災地を見て、感じる



初等教育学科3年

渡辺詩乃

2013年8月上旬、私たち地学ゼミは合宿で宮城県へ行った。東北地方に行くことが初めてだった私は、期待で胸がいっぱいだった。しかしそれと同時に、宮城県の沿岸部に出向くということは2011年3月11日の忘れもしないあの震災で最も大きな被害を受けた地へ出向くということであり、この機会に震災について自分自身が考え直そうと思っていた。

合宿2日目の昼下がり、宮城県の石巻市東部の沿岸に着くと、次第に辺りの景色は変わり、不自然なほどにだだっ広く更地が広がり始めた。ブルドーザーが点々と停車してあり、草が生い茂ったその地は、震災前はどんな状態だったのか想像がつかなかった。時々固めて置いてある大量の貝殻や、養殖に使用していたと思われるカラフルな浮き

具がやけに生々しかったのを覚えている。

3日目の朝、私たちは牡鹿半島から南三陸町に向かった。その道中で、私は忘れられない光景を目にする。それは、何もない海岸沿いの更地にぽつんとたたずむ、赤いポストである。コンクリートで固められた土台が、しっかりとポストを立てていた。中井先生が、「津波が来る前、ここに郵便局があったのかもしれない」と言った。全員の口から言葉は出なかった。半島では海岸沿いにできた洞窟や、たくさんの露頭を観察することができた。そこで出会った女性がいる。その女性は近くに住んでいる方ようで、「どこから来たの?」と声をかけてくれた。女性に震災のときの話を聞くと、「どこもかしこも海の近くは何もなくなってしまった」と遠くの海を見つめていた。この海岸が好きで、今でもよくこの景色を見にここへ来るのだという。震災で変わり果ててしまった故郷の姿を見ることの苦しさを考えると胸が痛んだ。しかしそれ以上に、変わり果てた海岸も、人々を襲った海も、変わらずに



日本三景・松島にて

その景色を愛し続けている地元の方の深い愛情を感じることができた。

テレビを通してでしかみたことのなかった被災地。私たちがこの地のために何かをしたのか、と聞かれれば、何も胸を張って答えることはできない。しかし私は、この地を自分の目で見て、いろんなことを感じて、これからは震災のことを忘れないようにすることに大きな意味があると思う。この夏、宮城県で見た景色を、感じたことを、私は忘れない。忘れられない。



被災地の赤いポスト（石巻市鮎川）

夏季休業を利用して学外で学ぶ

文献研究と文化体験
の連繫

国文学科准教授

加藤敦子

卒論の中間報告が主目的のゼミ合宿に、「新しい歌舞伎座で歌舞伎を見たい！」という学生の希望で歌舞伎観劇を組み込みました。残念ながら歌舞伎座ではなく新橋演舞場での観劇でしたが、最終日の文学散歩と合わせ

て、学生たちにとっては江戸の文化や思想を肌で感じる良い機会となりました。今後も積極的に、演劇や美術、音楽に触れ、史跡や現場を踏査して、知見を広めてほしいと期待しています。

平成25年度近世ゼミ
合宿に参加して

国文学科3年

佐々木あやめ

私たち近世ゼミは九月四日から六日までの三日間、東京で三、四年合同のゼミ合宿を行いました。その内容は四年生の卒業論文の中間発表を中心に、さらに現代にも残る近世の文化に触れるため、歌舞伎を見るというものでした。

初日は昼頃に現地集合し、新橋演舞場にて九月大歌舞伎を見ました。演目は「元禄忠臣蔵 御浜御殿綱豊卿」「男女道成寺」「天衣紛上野初花 河内山」の三つです。この中でも個人的に印象に残ったのが「男女道成寺」です。これは、女形と立役の男女二人がかわるがわる、あるいは一緒に踊る歌舞伎舞踊です。二人の息の合った踊りは華やかで美しく、見ていてとても楽しめました。私も含めて、学生の多くが歌舞伎を見るのは初めてでしたが、日本の伝統芸能に少しでも触れることができて良かったと思います。

初日の夜、さらに二日目のほとんどの時間をかけて行われたのが、今回の合宿の第一の目的である四年生の卒業論文の中間発表です。一人一時間という持ち時間のなかで、それぞれの卒業論文のテーマやそれに関する先行研究、そしてこれからの課題や方向性などを発表しました。学生同士での意見の交換や議論も白熱し、発表時間の合計が十一時間を超える長丁場となりました。発表した四年生だけでなく聴いている三年生にとっても視野を広げるよい機会でした。発表が終わった後にはコンパを行い、親交を深めました。

最終日である三日目は、宿泊先であり、文学とも関わりの深い本郷・谷中・湯島界隈を加藤先生の案内で三時間ほど散策しました。所々で加藤先生の解説やお話を聞きつつ、神社や上野公園などを巡りました。最後に学問の神様である菅原道真を祀



湯島天神に奉納した絵馬

る湯島天満宮へ行き、ここで一人一言ずつ絵馬に願いや目標を書きました。ゼミ合宿の最後を飾る良い記念になりました。

このゼミ合宿を通して、大学の講義だけでは学ぶことのできない多くのことを体験し、近世文学についてより深く関心を持つことができました。この三日間はあまり休む暇もないほど忙しく、大変でしたが、学生一人一人にとって有意義な時間になりました。この合宿を生かして、四年生は卒業論文の完成を目指し、三年生は来年の自分の卒業論文についての方向性を少しでも掴めれば良いと思います。



合宿所は「石川啄木ゆかりの宿」

夏季休業を利用して学外で学ぶ

英文学科・英語圏
事情研修

英文学科教授

西出公之

「英語圏事情研修」は約2週間の海外研修科目である。講義科目である「英語圏事情（現カリキュラムではCurrent Issues in ESW）」に対応するスタディ・ツアーとして開設された。「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と順次実施されるので、最大6単位まで取得で

きる。毎年、研修先と内容が変わるので、担当者は費用が抑えられ内容が充実したプログラムを企画すべく努力している。昨年度は春季休暇中の3月にニューヨークで、今年度は夏季休暇中の9月にロサンゼルスで実施された。

英語圏事情研修を
終えて

英文学科3年

伊志嶺明子

9月1日から2週間の日程で米国ロサンゼルスへ英語圏事情研修に行ってきた。午前中は語学学校に通い授業を受け、午後はロサンゼルスの子どもの名所を視察するという内容であった。英語を母国語としない学生への英語教育を受けるとともに、初めて目にする街並みと現地の人とのふれあいもあり、五感でアメリカを感じることができた。すべてが日本では経験できない貴重な体験でありとても刺激を受けた。

語学学校は初日にプレイスメントテストを受け、英語の習熟度によってクラスが決まる。私は8段階あるうちの上から3番目のクラスで、日本人は私を含めて4人、他はサウジアラビア、韓国、スイス、ブラジル、カザフスタンなど15名程の多国籍で構成されていた。

授業はユニークでアメリカンコメディを見ながらネイティブの言い回しやニュアンスを学び、グループワークやペアワークで

は積極的な発言を求められた。また、クラスメイトと仲良くなると同時に彼らの母国の文化や言語、歴史にも関心を持つようになり、今まで遠いと思っていた世界が身近に感じるようになった。

午後はチャイニーズ・アメリカン・ミュージアム、ジャパニーズ・アメリカン・ミュージアム、サンタモニカ、UCLAなど多くの名所を視察することができた。その中でも一番印象深かったのがジャパニーズ・アメリカン・ミュージアムである。

ここでは日系人の移民の歴史や、第二次世界大戦中に敵国民として強いられた生活、そして戦後の歩みについて学ぶことができた。私たちをガイドしてくださったのは80歳代の日系2世の方で、実際に戦時中強制収容所での生活を体験されていた。

彼は私たちに日系人の歴史や強制収容所内での体験を話してくれた。戦時中から長年受けてきた差別により日系人であることに後ろめたさを感じていたが、それでも今は日本人の血を受け継いでいることを誇りに感じていると話してくれた。私はこれまで日系人に対する知識が乏しかった自分が日本国民として恥ずかしくなったし、より多くの日本人が知るべき歴史であると感じた。

そして最後に2週間と短い滞在だったが、日々新しい発見があり学びの連続だった。とても貴重な体験であり、この研修で得たことをこの先の学びに生かしていきたい。今回このような素晴らしい研修を企画、運営してくださった竹島先生、西出先生に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。



ホームステイ先のホストマザーと

夏季休業を利用して学外で学ぶ

瀬戸内国際芸術祭2013を訪れて



社会学科教授

前田昭彦

3年に一度、瀬戸内海の東側のいくつかの島で開かれる瀬戸内国際芸術祭2013に私を含めて10名で訪れた。船を多用するので台風を恐れていたが天候にはめぐまれた、というか、連日の炎天下の猛暑となり、若い学生

たちにもかなり体にこたえたようだ。とはいえ、青い海と広い空、里山、棚田と菜園まじりの古民家の街並みの中でみるモダンアート群は、格別だった。

瀬戸内海の島々を満喫したフィールドワーク



社会学科3年

松尾知香

都市環境設計論ゼミでは8月7～10日にかけて瀬戸内国際芸術祭2013へ向かいました。この芸術祭には、時代の流れの中で人口減少・高齢化で地域の活力が低下する瀬戸内の島々をアートの力で再び活性化させたいという目的が込められています。

1日目は現代アート作品数が一番である直島を訪ねました。特に印象深かったのが「家プロジェクト『角屋』Sea of time98」(宮島達男)です。200年程前に建てられた家屋を元の姿に修復して、その中に作品が展示されています。中に入ると水をはった水面下のある部屋に着きます。その水面下に散りばめられた沢山の数字が点滅していて、その点滅のタイミングはそれぞれ異なっています。ちなみに、それぞれの点滅のタイミングは直島の住民が決めています。つまり自分のペースで時間を刻ませることができるのです。この作品を観て、人間はそれぞれ違う時の刻み方をして生きているんだと感じました。

2日目は女木島と男木島を訪ねました。女木島は桃太郎伝説でおなじみの鬼ヶ島であるとも

伝えられている島です。この特徴を作品にした「オニノコ瓦プロジェクト」(鬼の子プロダクション)がありました。男木島は坂道や細い路地が多く、車が通れない場所に家があるという特徴から重い荷物を楽に運ぶためのオンパ(乳母車)は生活に欠かせないものです。そのオンパを作品とした「オンパ・ファクトリー」(オンパ・ファクトリー)では個性豊かなオンパが沢山あって面白かったです。

また、この2日間はパオがある直島の宿泊所で寝泊りしました。ホテルの一室ともテントとも違う不思議な空間でしたが、なかなかできない体験ができました。

3日目は豊島を一日かけて巡りました。ここで感動したのが「心臓音のアーカイブ」(クリスチャン・ボルタンスキー)です。ハートルームと呼ばれる部屋では心臓音の鼓動に合わせて電球が明滅しています。ここで使われるのはアーカイブを訪ねた人々の(有料で)録音した心臓音なのです。何分置きに心臓音が変わるのですがそのたびに全く違う音をしていました。それに自分がアート作品の一部になるということはめったにあり



てんとうむしのオンパ

ません。この取り組みは面白いと感じました。

最終日は犬島へ行きました。採石場として栄えた島で犬島精錬所美術館が有名ですが、自分は「家プロジェクトI邸/Universal Reception」(前田征紀)が印象に残っています。作品自体も良かったのですが、家の中は錯覚を起こしそうな真っ白な空間で不思議な気分になりました。家の外には島民も協力した季節の変化を楽しめる花々が植えてある庭が広がっていました。

フィールドワークを通して様々なアート作品に触れることができました。「アート」と聞くと取っ付き難い印象がありますが、思いのままに作品の意図を想像することはとても面白いものです。また、どの島でもそこに住む人や島の歴史・特徴を生かした作品ばかりで、島や島民を大事にして芸術祭を開催していることが分かりました。これは実際に行って作品に触れてみないと分からないことだと思います。本当に有意義な4日間でした。



カフェにさりげなく飾られたオンパ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

夏休み、石垣島スタ
ディーツアーでの体験

比較文化学科准教授

山本芳美

石垣島の北部開拓集落である明石に、学生とまつりをお手伝いするスタディーツアーを今年も8月下旬におこないました。卒業生で「八重山毎日新聞」記者、松井弥恵子さんの取材があり、「大学生たちが講義の一環で八重山に滞在しますが、長く続く例はないです」と言われました。新聞のコラムにも「都留文科大生ら、明石の開拓歴史学ぶ。10年目。地域も歓迎」とあり、ありがたかったです。（※学生はすべて比較文化学科）

学生たちの感想を抜粋します。

2年生倉田桃子さん「沖縄の文化を、実際に肌で感じる事ができる貴重な体験でした」。

3年生島田友弥さん「現地の方への開拓時代のインタビュー、農業体験、散策など、どれも新鮮で、驚きと発見の連続でした」。

2年生久野茜音さん「天文台や平久保岬などで先生の解説を受け、楽しみながら石垣島について勉強できました」。

2年生棚田真由さん「ヤモリが鳴くのを見たことがありませんでした。ヤモリからキーキーと鳴き声がし、私のイメージはあっという間に覆されました。些細ですが、大学と自宅の往復をする生活では味わえないことでした」。

2年生浅川美由さん「大学でのエイサーの練習は、苦戦しました。曲調が似ており、タイミングが上手く掴めませんでした。現地での練習に参加し、地元の人々のエイサーを見て、全然なっていないことを実感しました」。

2年生海賀沙也佳さん「感じたのは、人と人のつながりの大切さでした。明石の方々は、伝統の踊りであるエイサーを熱心に指導してくれました」。

2年生黒木珠紀さん「1週間滞在しましたが、離れがたく感じました。飛行機に乗るときに

も寂しさを覚え、思わず『帰ってきちゃった』と嘆いてしまいました」。

3年生井上雅大さん「前日からの台風にも関わらず、祭りは無事成功に終わった。祭りの後は『反省会』。夜が明けるまで集落の人たちと語らい、あっという間に楽しい時間は過ぎていった。私の感想は、『踊りきれて良かった』と留めておきたい。詳しく知りたい方は、来年ぜひこの授業をとり体感してほしい。あまりにも難儀で、貴重な体験だった」。



八重山毎日新聞 8月21日(水)



踊りを見に来てくださった松井さんのお母さん（右）との、エイサー祭り前の記念写真。

教育実習を終えて



初等教育学科3年

岩下翔平

「砂上の楼閣」という言葉がある。見た目だけが立派で基礎がしっかりできていないという意味だが、教育実習に行く前までの私はまさにその言葉がぴったりだった。

実習に行く前は1か月も実習が出来るのか、担当は4年生だが授業は上手くやれるのかと心配ごとを考えればきりがなかった。そういった不安を払拭するために私は図書館へと向かい、授業の面白い進め方の本などを多く借りては一日かけて読んでいた。とにかく外観だけでもしっかりしようと必死だった。

そして実習当日、全校朝会、職員朝会でのあいさつが終わって一息がついたころ、校長先生と話せる機会をいただいた。話の内容は上手くいったかと不安になっている私に校長先生は優しくおっしゃった。

「そのメモ帳で話を聞くつもりですか？」

心臓が止まるかと思った。授業、子どもへの接し方、それ以前に自分の礼儀のなさに全く頭が回っていなかったのだ。校長先生はそれを厳しく咎めることはなかったが、私はとても反省し、今からは礼儀に関してはミスをしなと自分に誓った。

実習が進んでいく中で、いよいよ自分が授業を持つ日が来た。

今こそ図書館で借りた本を使う時だと思い、意気揚々と作り始めた。しかし指導案を書いていき、細案を考えていくと指導案を書く私の手は止まった。当日の授業風景が上手くイメージできないのだ。本に書いてあるような子どもの反応は自分のクラスの子供はしない。もっとつかかってくるはずだ。それに私はこの通りに本当に授業が進められるのか、と考えだすと大学や指導担当の先生が口をそろえていった言葉を思い出した。

「教師は子どものことをよく見なさい。」

今まで何度も聞いた言葉ではあったが、その時にようやく実感を持って理解した。どんなに上手い授業であっても私には同じことができるほどの技量はないし、そもそも対象として子どもが違うのだ。どちらも同じ

4年生。だけど私が今担当しているのは相浦西小学校の4年2組なのだ。それぞれの子どもの実態に合わせて授業を組み立てるという言葉がようやく理解できた時だった。

この実習を通して学んだことは数多くあったが、「礼儀をわきまえる」「目の前の子どものことをよく考える」という基本的でありながらも、大切なことを上記の経験を通して深く学ぶことができた。授業が上手くいくかどうか、内容が面白いのか以前に子どもとのコミュニケーションがとれてなければいけない。教師は子どもがいなければ成り立たないということを感じた1か月であった。この実習で得た経験を無駄にせず、いつかは立派な楼閣になれるよう自分を磨いていきたい。



ふるさと体験学習にて 4年2組の児童たちと

教育実習を終えて



国文学科3年

遠藤桂花

この夏、四週間にわたり母校の中学校で教育実習をさせていただきました。

実習の目標の一つとして、生徒の状況を把握するため学級指導・授業外の生徒指導などを通して生徒と積極的にコミュニケーションを図ろうと心がけました。初めは不安も大きかったのですが、毎日の生徒との関わりが本当に楽しく、「一人ひとりが大切な生徒で、その子供達を私達教師は預かっているんだ。」という先生の言葉に共感するとともに、教師はそれを忘れてはならないのだなということを感じました。今の生徒達について「以前よりもずっと、表面上では見えない部分が増え、複雑になっている。」と校長先生が仰っており、生徒を取り巻く環境や抱える問題について常に心に留めておくこと、そして普段からの連携が重要なのだと、先生方の連携体制の素晴らしさを間近に見ていて思いました。自分が生徒だったときは気づかなかったのですが、本当に組織としての連携があつてこそ、生徒達はいきいきと学校生活を送れているのだと今回実感しました。

また、他の先生からの助言で「誰だって人に弱みは見せたくないもの。問題は見つけようと

するのではなく、生徒と沢山接するうちに（普段と違う部分に気づくなどして）自然と見つかるものだ。」と言って頂く機会があり、それまで教師は生徒の悩みに気づいてあげなければと構えていた部分があつたので、考え方を変えるきっかけとなりました。生徒と授業中、教科外活動中関わっていく中で、彼らの表情、言動はもちろん、提出物一つとっても生徒を知る手段となり、先生方は生徒を本当によく見ていらっしゃるのだなと教師としての凄さに圧倒されると同時に、改めて教師として生徒一人ひとりを知ろうとする姿勢を大切にしようと思い生徒と接することが出来ました。

授業は一年生のクラスを担当したのですが、同じ授業でもクラスによって雰囲気も反応も違うことに初め戸惑いました。それと同時に、授業を展開していく上で一番重要なのは、生徒の意見をどう生かし、どう深め、どう他の発問に繋げていくかでした。どうしても教材研究の際

に取り上げたいと考えた部分を盛り込みすぎて、時間配分や展開の繋がりが上手くいかず、生徒達に本当に考えさせたい部分が深められなかったことがありました。しかし、そのような反省の中で指導教官の先生に、授業内容を精練させていく勇気も必要だと教えて頂きました。また、一年生から三年生まで他の先生方の授業を見学させて頂いたことで、その学年・クラスに合った指導を考える大切さを学び、学年ごと生徒同士の結びつきも異なることを踏まえてグループワークの取り入れ方の工夫をするなど、授業づくりは取り組みれば取り組むほど良いものになり、そしてゴールがないものであるとも実習中常々感じました。

一日一日が濃密で、多くのことを吸収し、学ぶことが出来た四週間でした。明確になった課題を一つでも多く克服し、知識の充実を図れるよう、これから一層励んでいきたいと思います。



担当クラスの生徒、先生から戴いた色紙と短歌

教育実習を終えて



英文学科 4 年

阪本 遵

私は今年の6月に、母校である神戸市立葺合高等学校で教育実習をしました。「実習生としてこの学校に帰って来たい」という高校卒業時からの想いを実現させることができ、実習中の自分の目標として、「授業において生徒からの発言を引き出すこと」と「生徒一人一人の理解に努めること」を掲げて臨みました。

英語の授業は国際科と普通科のクラスを担当し、大学のゼミや授業などそれまでに身につけた知識や技能を実践に活かすことができました。特に国際科の生徒は英語力が高く、授業は基本的に英語で行いましたが、毎回改善点を見つけながらも、生徒から考えや答えを引き出し、充実した授業を行うことができました。研究授業では、ゼミの三浦先生をはじめ、高校時代にお世話になった先生方から高い評価をいただき、自信をつけることができました。

担当のホームルームは、国際科2年生のクラスでした。とても活発で、生徒同士の結束が強いクラスでした。放課後や文化祭の準備の時などには、積極的に自分から生徒に話しかけ、生徒のことを深く知ろうと努めました。生徒の名前を覚えて、一人一人名前を呼びながら会話す

ることで、悩みや進路、将来のことなど、より深い話をしてもらえようという良い関係を築くことができました。文化祭では、主体的に他と協力しながら模擬店を催したり、笑顔いっぱいでのステージパフォーマンスを行ったりする、普段では見ることでできない生徒の姿を見ることができました。最終日には、生徒たちから寄せ書きの色紙をもらいました。「先生はもうクラスの一部やのに、おらんくなってしまうのは寂しい!」「私も先生を目指していて、先生のような先生になろうと思いました!」「先生を見て、先生と同じ大学に行きたいと思いました!」などといったメッセージが書かれており、感慨無量でした。

私は今回の実習で、教師という仕事の魅力、楽しさ、そして

難しさを体感しながら、思春期真っ只中であり、悩みの種が多い高校生に、教師として関わっていきたくと心から思うことができました。また、教師には様々な校務があるため、生徒一人一人と関わる時間がとても少ないということに気づき、その限られた時間の中でいかに生徒と関わり、理解を深めていくかということが難しい点であるとも感じました。

私は、幸い、兵庫県高等学校英語の採用試験に合格することができました。教育実習を通じて、改めて「教師になりたい」という想いを抱いたからこそ、採用試験を乗り切ることができたと思います。丁寧なご指導をいただいた葺合高校の先生方や、担当したクラスの生徒たち、そして実習中に支えてくれた家族に感謝の意を表します。



楽しい文化祭

教育実習を終えて



社会学科 4年

金子明弘

今年、母校の高等学校で教育実習をさせていただきました。4週間という短い実習期間でしたが生徒との関わり合いにおいて様々な事を学ぶことができました。

まず一番感じたことは、「教師」の責任の重さでした。自分を実習生という立場で教壇に立たせてもらいましたが生徒が私を見る目は「教師」を見る目でした。真剣に話を聞いてくれましたがその喜びと同時に、この生徒たちには間違ったことは決して言えないと思い、よりいっそう教材研究に力を入れました。教壇に立つ以上は、実習生であっても新任・ベテラン教師も生徒にとっては1人の「教師」でしかないと感じました。

授業面では、初めは緊張して自分の思う通りに授業が展開できなくて苦悩しましたが、日を重ねるごとに緊張が解け段々と上手くできるようになっていきました。しかし、3週間目あたりに私の授業を見た指導教官から「教師はうなずいてくれる良い生徒にばかり目がいってしまい、そのレベルで自分の授業に自己満足してしまう傾向がある」という言葉をもらいました。自分の授業は少しずつ話をよく聞いてくれる生徒に対しての授業になっていました。本当はつ

まらなさそうな顔をしている生徒にこそ授業を届けなければならないのに自分の弱さからうなずいてくれる生徒に助けを求めがちになっていたのです。その言葉をもった後からは、社会が苦手な生徒が興味を持つことができるような授業をいかに展開できるかを考えながら教材研究に励みました。

生徒との関わりの面では、積極的にコミュニケーションをとるようにしていました。ひとりひとり個性があり、毎日生徒と関わるのがとても楽しかったです。また、実習中にクラス対抗のスポーツ大会が行われました。自分のクラスは、ソフトボールが1位でバレーボールが2位と好成績を残し総合優勝を果たしました。しかし、私は総合優勝という結果よりも一生懸命競技

に臨んでいる生徒や仲間のために大声を出して声援をしている姿にとっても感動しました。生徒個人としてもクラスマッチを通して一回り成長した姿がありました。このような体験も教師の喜び・やりがいのひとつであると感じました。

今回の教育実習を通して改めて教師という職業のやりがい・喜びを感じることができました。それは、ひとりひとりまったく違う個性をもった生徒と接し、知る喜びを教え、日々の成長を見ることでした。もちろん楽しいことだけでなく、教師の実態として授業以外にも様々な業務があり、とても忙しく大変そうでしたがそれ以上の喜びでした。今回の実習で学んだことをこれから始まる教員生活に活かしていきたいと思います。



2年2組の生徒たちと

講演会だより

2013年度 初等教育学科講演会 小松佳代子先生

『現代教育への提言
—生きる力は周辺教科でつくられる—』

本年度の初等教育学科講演会は、7月11日（木）に東京藝術大学美術学部美術教育研究室准教授である小松佳代子先生を講演者としてお迎えし、「現代教育への提言—生きる力は周辺教科でつくられる—」の題目で行われました。

小松佳代子先生は東京大学大学院教育学研究科単位取得退学、2004年には博士号（教育学）を取得されました。近年は所属である東京藝術大学を拠点として、教育学の見地から現代社会における図工・美術のもつ教育的意義を研究するとともに、芸術教科や体育などの、いわゆる「周辺教科」に関する今日的な課題についても研究を行っておられます。昨年はこういった研究の成果として著書『周辺教科の逆襲』を出版されました。

昨今の学校教育では理科や算数といった主要教科の重要性を

見直す声が多い中、教科教育としての音楽、図工、体育、生活にはスポットライトが当たりづらい現実があります。

こういった背景を踏まえ、本講演では小学校における教科教育の成り立ちや理解について、主要教科といわれる周辺教科の関係について、概念図等の資料を交えながらお話し頂きました。また主要教科に対して周辺教科のもつ役わりと、今日的な可能性についてもご講演いただきました。

今回の講演会はこれまで見過ごしがちであった視点から、改めて教科について考えるきっかけとなることを願って、実技系教室（音楽教室、図工・美術教室、体育教室、生活教室）から提案しました。

当日は18時10分開演でありながら、本学学生や地域の小学校の先生方を含め、70名ほどの参加者がありました。おかげさまで多くの成果と、今後の課題を得ることができました。

文末ながら、ご参加いただきました来場者の方々、開催に向けて御協力頂きました関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

（初等教育学科図工・美術教室
教授 鳥原正敏）



会場風景

〈講師紹介〉



小松佳代子先生

【略歴】

1995 東京大学大学院教育学研究科単位取得退学

2004 博士（教育学：東京大学大学院教育学研究科）

現在 東京藝術大学美術学部美術教育研究室准教授

美術教育研究会会員、日本ラグビー協会競技力向上委員会、科学・情報部会委員、教育史学会会員

【近著】

2006 「かたり・ふるまい・教育」『流通経済大学体育指導センター紀要』創刊号

2007 「スポーツの人間形成機能を考えるために」（共著）流通経済大学『スポーツ健康科学開校記念論文集』

2009 「場所・身体・美術教育」美術教育研究会『美術教育研究』第14号

2011 『美術と教育のあいだ』東京藝術大学美術教育研究室編（東京藝術大学出版会）

2012 『周辺教科の逆襲』小松佳代子編（叢文社）

講演会だより

2013年度 英文学科講演会 松土 清先生

『日本の英語教育を……』

2013年7月10日（水）、本学にて英文学科・英文学会共催前期講演会が開催されました。講師には特任教授である松土清先生に、「日本の英語教育を……」という演題で日本の英語教育の構造改革について講演して頂きました。

講演は国内における英語教育の状況、それを取り巻く国外の状況を考察し、そこから現在の課題点とこれから教育が目指していくべき方向性の提示という構成で進められました。会場には学内からは200名余、学外からは現職の先生方など72名が集まり満席を上回りました。皆それぞれの立場から講演の内容を考え、吸収しようと熱心に聞き入っていました。特にアジア諸国の英語教育とこれからの日本の英語教育に求められていること、というトピックには多くの人が関心を抱いていました。前半ではシンガポールの例が中心に挙げられています。国の経済を立て直すため、国語を世界で多く使用されている英語にし、教育言語を英語にするという政

策をとり、みごとアジア頂点の教育力と経済力を達成したというものです。また具体的な数値として、中学3年間分の語彙量が日本・中国・韓国・台湾との対比で提示されました。それは日本の語彙量が断然少ないことを示しており、会場からは大きなうめきが沸きました。後半では日本人が英語に求めているものを、大きく変える必要性が語られました。今までは一般教養・受験科目・知識としての英語であったものを、これからは生活の質を高め・国際競争力を高め・道具として使う英語という概念変革が求められているとする考え方です。つまり、英語教育に求められているものは「知る」ではなく、「使う」に

着目した授業提供と大量インプットによる英語操作力の向上なのです。これらは英語教育の根本にも触れたものであったため、多くの人が特に忙しそうにペンを動かしていました。

今回は今大きく変わろうとしている英語教育についてであったため、学科の垣根を超え多くの学生が興味を持って聞くことができたと思います。また先生が常に国内と国外を対比して説明して下さったことにより、日本の状況を客観的に見る事ができました。講演から日本の教育の現状や、それぞれの立場でできることをまず最大限やる姿勢が大切であることを学びました。このことを胸にとめ、自分の置かれた環境でしっかりと考えつつ、今後の学習に力を入れていきたいです。お忙しい中、とても有意義な時間をありがとうございました。

(英文学科2年 平澤真穂)



会場にて

〈講師紹介〉



松土 清先生

都留文科大学英文学科卒業。英米への留学経験を踏まえ英語授業の改善に取り組み、複数高校の校長を歴任された。2009年山梨県教育委員会教育長に就任され、2011年までの2年間に渡り山梨県の教育向上に尽力された。当時では初となる教育長の出前授業など、現場との距離を大切にされていた。現在は本学の特任教授としてキャリア形成・教職実践演習・上級特別英語演習・英語教育特殊演習・英語音声学など、多岐にわたり指導されている。

文大だより

都留文科大学合唱団 5年連続で全国大会金賞

9月29日（日）第68回関東合唱コンクール（第66回全日本合唱コンクール関東支部大会）が静岡市であり、都留文科大学合唱団は大学職場一般部門—大学ユース合唱の部—で金賞第1位を受賞し、全国大会の出場が決まりました。部門の1位ということで支部長賞を、また3日間の全部門を通じて総合1位となる全日本合唱連盟理事長賞をあわせて受賞しました。

11月23日（土）に千葉県文化会館で開催された第66回全日本合唱コンクール全国大会では、出場12団体中3団体のみに与えられる金賞にあわせ、日本放送協会賞を受賞しました。

本年度からこれまでの大学部門が廃止となり、28歳までという年齢枠のある部門へ変更がありました。厳しい条件の下での金賞は更に価値ある受賞となりました。

～都留文科大学合唱団顧問 初等教育学科教授 清水雅彦のコメント～

これまでの大学部門が廃止され、新設された28歳までで構成される「大学ユース部門」への参加となったことで厳しい状況を予測していましたが、価値ある金賞をいただけたことを、心よりありがたく思っています。本当に真摯に取り組んでくれる学生の資質は、都留の資質そのままです。学生とともにさらに精進したいと思います。

皆様には、いつもあたたかいお言葉をおかけくださること深謝しています。

今後ともお導きくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。



2013全国大会表彰式後会場にて

第3回つる白熱教室

去る6月17日、「第3回つる白熱教室 原田謙介ぶっちゃけトーク VOTER'S BAR in つる」を無事に終えることができました。

前回に引き続き、NPO法人Youth Createの代表である原田謙介氏をお招きし、「政治家と若者が直接話せる場を設ける」ことを目的とした『VOTER'S BAR』を企画したイベントです。第2回の白熱教室では、原田謙介氏単独の講演会という形でしたが、今回は原田氏にMCを担って頂き、学生と議員の方々のトークを中心に置きました。

議員の方が普段何をしているのか。日本の授業料は安くないのか。若者はこれからどうすべきか、インターネット選挙活動の解禁について…等々、質疑応答や話題は絶えず、積極的な意見交換がなされました。普段では拝聴出来ない貴重なお話も伺え、一個人としても学生としても考えさせられることがありました。約3時間という長時間のトーク会でしたがアンケートでは好評の声を頂き、参加した学生のみならず一般市民の方々にとっても非常に有意義な機会になったと思います。

若者の政治的無関心が嘆かれる昨今ですが、関心を持つ学生は存在しています。今の日本には、こうして直接政治対話が出来ることが求められているのではないのでしょうか。このトーク会をきっかけに、その輪が広がることをTrinity一同願っております。

最後になりましたが、ご多忙の中、賛同、参加して頂いた議員の皆様には改めて厚く御礼申し上げます。

文責：社会学科4年 三村実可子(実行委員長)

▽参加議員（五十音順、敬称略）
 桐原正仁 甲州市議会議員
 清水絹代 都留市議会議員
 杉山 肇 山梨県議会議員
 中谷真一 衆議院議員
 中村勝彦 甲州市議会議員
 宮川典子 衆議院議員
 森屋 宏 参議院議員
 山下利夫 富士河口湖町議会議員



集合写真

文大だより

陸上競技部沖田真理子選手が全国大会で優勝

6月21日～23日の3日間、平塚市総合公園Shonan BMW スタジアム平塚で開催された2013日本学生陸上競技個人選手権大会の女子800mにおいて、本学陸上競技部沖田真理子（初教3年、北海道伊達緑丘高校出身）が見事優勝、全国チャンピオンとなった。

沖田は、これまでの陸上競技のキャリアにおいて全国大会で入賞したことはなく、今回、全国大会での初入賞を見事優勝で飾った。

この大会においては、他にも高橋優香（初教4年、山形県立上山明新館高校出身）が女子200mで5位となり、自身初の全国大会入賞を果たした。



表彰式に臨む沖田真理子選手（中央）

日本選手権リレー大会で入賞

平成25年10月25日～27日に開催された第97回日本陸上競技選手権リレー競技大会において本学陸上競技部員が女子4×400mリレーで8位入賞を果たした。

メンバーは、第1走者西田彩乃（初教4年、宮崎北高出身）、第2走者沖田真理子（初教3年、伊達緑丘高出身）、第3走者高橋優香（初教4年、上山明新館高出身）、第4走者池嶋祥子（初教2年、柏崎高出身）であった。

今シーズンは苦戦の連続であった同リレーチームであるが、シーズン終盤の最も大きな舞台でようやく結果を残すことができた。来シーズンも、今回はサブにまわったがチームを引っ張っ

てきたリーダーの竹山由希子（初教4年、鹿児島女子高出身）を含めた4年生の志を受け継ぎ、3年生以下のメンバーが活躍してくれるものと期待できる。



左から第4走者池嶋選手・第3走者高橋選手・第2走者沖田選手・第1走者西田選手

（陸上競技部顧問 初等教育学科教授 麻場一徳）

文大だより

第40回鶴鷹祭開催

6月22日（土）と23日（日）の2日間にわたり、伝統の鶴鷹祭（総合体育対抗戦）が開催されました。会場は都留文科大学と高崎経済大学での隔年開催となっており、本年は都留文科大学が決戦の舞台となりました。

鶴鷹祭の名は、都留文科大学を『鶴』、高崎経済大学を『鷹』と見立て、鶴鷹祭（かくようさい）と命名されました。毎年6月の末頃に日ごろの練習の成果をぶつけ合い、同時に、交流を深めます。

「鶴」は「『繋ぐ』～伝統・絆・連覇」をスローガンとし、伝統を未来へ、都留文科大学と高崎経済大学の絆を繋ぐとともに、連覇へ勝利を繋ぐべく臨みました。「鷹」は昨年の雪辱を晴らすべく、「翔け鷹よ、再び頂点へ！」をスローガンに臨みました。

出場団体の総人数は高経大550人弱と都留大は350人弱、両校併せて900人ほどの学生が互いに競い合い、励まし合い、お互いの力をぶつけ合いました。

開会式では伝統となっている両校の応援団によるエールの交換とともに、本学のモダンダンスサークルによるチアリーディングが披露され、華を添えました。

初日はバスケットボール、サッカー、準硬式野球等の競技が行われ、「6（都留大）－7（高経大）」と高崎経済大学が優勢で折り返し、ここ3年の「アウェイが勝利するジンクス」をやぶることはやはり難しいと思われましたが、バドミントン、ソフトボール、弓道等が行われた2日目には「6（都留大）－4（高経大）」と盛り返し、結果「12（都留大）－11（高経大）」と逆転、都留文科大学が見事に総合優勝を納めました。

過去40回通算成績は都留文科大学22勝、高崎経済大学16勝、引き分け2となっています。両大学の名誉と威信をかけて開催されたスポーツの祭典「鶴鷹祭」は、様々な感動的ドラマを生み出し、両校の絆を深めました。来年の熱き戦いは、さて如何に。「鶴」の3連覇に期待します。



達磨開眼



優勝旗授与

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

今年の夏季オープンキャンパスは、7月20日（土）に開催いたしました。主要なイベントとしては、学科別説明会、大学概要説明会（1・2年生向け）、学科別特別講義、学生ガイドによるキャンパスツアー、個別相談会（大学周辺・下宿情報含む）、学食体験などを実施しました。本部棟前広場やコミホ2Fアートシアターでは各部・サークルの発表が行われ、日頃の練習の成果を披露し、各団体の魅力を大いにPRするとともに、参加した高校生や保護者を楽しませてくれました。また、例年行われているこれらの催しの他に、今年はお弁当コーナーを設けたり、都留市のお土産品を手配（都留市ミニ物産展）し、都留市全体での「お・も・て・な・し」感を演出しました。

参加者は年々増加傾向にありましたが、今年は保護者等を含め、1,621名が参加しました。

参加された方からは「大学の雰囲気や周辺の状況などがイメージでしかなかったものを確実なものにすることができてよかった」、「先生と生徒の距離が近いところに魅力を感じた」、「個別相談で疑問点が解消され、受験に向け勇気づけられた」、「講義が面白くて入学したいという気持ちが強まった」、「受験に合格して文大生になります。」などの感想が寄せられ好評のうちに終了しました。本学の魅力を存分にPRすることができたと同時に受験生にとっても良い刺激になったと思われます。



資料配布



個別相談会



模擬授業の参加者



学科説明会の様子

文大だより

秋季オープンキャンパス報告

平成20年度から開催し、本年度で第6回を迎える秋季オープンキャンパスを10月14日(月)から25日(金)まで【水曜日、土曜日、日曜日を除く】の8日間にわたり開催しました。主な内容として、公開授業(90分)への参加、個別相談会、キャンパスツアー、学食体験などを実施しました。参加した高校生の総数は延べ307名と昨年の236名から大幅に増加しました。特に県内は119名と昨年の74名から著しく増加しました。これは、模試と重なり夏季オープンキャンパスへ参加できなかった生徒の参加によるものと考えられます。また、県外も162名から188名へと増加し、特に静岡県が50名と昨年の約2倍に増加しました。

恒例となったキャンパスツアーでは一昨年から本学学生がガイド役となり案内しています。保護者も含む参加者に対しキャンパス及び施設などを約50分かけて丁寧に説明しました。保護者からは「大学生の生のこえが聞けて大変参考になる」、「直に大学生に質問などもでき、また、詳しく説明してくれるので大学の様子がとても良くわかる」等、高校生からは、「先輩に直に質問できたので良かった」、「大学案内に載っていないことも聞けて良かった」等の声がきかれ大変好評でした。また、公開授業を受講した高校生からは、「深く掘り下げる内容に大変興味が湧いた」、「少人数での授業で、意見の交換も活発で発言内容のレベルも高く驚いた」、「入学してから大学の授業のレベルについていけるよう今からもっと勉強をがんばりたい」といった感想が多く寄せられ、高校生の本学への入学意欲を喚起する内容だったことがうかがえます。秋季オープンキャンパスは本学の受験を決めて参加する生徒が多くいます。今回の体験はきっと彼等の励みとなったことでしょう。



キャンパスツアーの様子



相談会の様子

前期修了者卒業式

9月25日(水)本部棟3階大会議室において、平成25年度前期修了卒業証書の授与式が執り行われました。今年は23名の学部卒業者のうち、15名が出席しました。

当日は、担当教員を含め多くの教職員の暖かい眼差しに見守られるなか、加藤祐三学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。卒業証書の授与後には、学長から本学の学章が表す意味や激励・お祝いの言葉が送られました。



授与式の様子

文大だより

第58回 桂川祭開催

10月31日（木）から11月2日（土）までの3日間にわたり、第58回桂川祭が多くの市民も参加するなか盛大に開催されました。今年のメインテーマは『頂（いただき）』。「桂川祭を大きな一つの山に例えてその頂上を目指し、目標を持ってみんなで素敵な学園祭を作り上げよう」という意味が込められています。

趣向を凝らした開会式でのバルーンリリースから始まり、学内の各団体による模擬店や文化展、大道芸人によるパフォーマンス、お笑い芸人のバイきんぐやアルコ&ピース及びバンドのUNCHAINによるライブが行なわれ会場は大いに盛り上がりました。

恒例の「学長と鍋ろう」では、学生の作ってくれた美味しい鍋を食べながら、加藤祐三学長及び高田理孝副学長と多くの学生が1時間ほど交流を楽しみました。学生からは「今日の朝食は？」といった日常についての質問から「人生を楽しむコツは？」といった深い質問まで、様々な質問が飛び交い、「最近朝食にフレンチトーストを食べている」という学長のウイットに富んだ返答に学生が沸く場面もありました。学生にとっては、普段は交流することが少ない学長を身近に感じるとともに、今後の人生において役立つ話を聞くことができる良い機会となりました。

最終日には都留動物園も開園され、小さなお子さんを連れたご家族も多く来場し、文大生だけでなく市民の方々も楽しめるイベントとなりました。閉会式では、多くの来場者の見守るなか、夜空に華やかな花火が打ち上げられ、3日間の幕を閉じました。

発表する催し物の練習や、各種準備のため、多くの学生が連日遅くまで一生懸命作業をしていました。また、「ごみ減量計画」や「酒類監督者である赤鉢巻部隊による見廻り」など、実行委員のみなさんが様々な取り組み・工夫をされたことで、ルールが守られた楽しい時間を過ごすことができました。来場いただいた方を含め、すべての参加者が力を合わせたことにより、最高に素敵な学園祭という「頂」に辿り着けたのではないのでしょうか。



モルモットに触れて感動する子ども



都留コン2013

《桂川祭を振り返って》

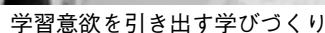


本年度の第58回桂川祭は、10月31日（木）から11月2日（土）の3日間行われました。「頂（いただき）」をテーマに掲げ、様々な催しをご来場の皆様楽しんでいただけたと思います。桂川祭という「頂」から、参加して下さった皆様と一緒に素敵な景色を眺めることができたと感じています。最後になりましたが、大学関係者の皆様、地域の皆様、学生の皆様のご協力のもと無事に全日程を終了することができました。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

第58回桂川祭実行委員会 委員長 田立友里

現職教員教育講座

有効な実験の方法」をテーマとした平野耕一先生の講座では「準備が大変で実験は敬遠されがちであるが、生活の中にたくさんの小さな科学が潜んでいるのだと感じました。」等の感想が、「子どもに寄り添い、支えるとはどういうことなのか、その手立ての中心となるべき学習指導のあり方」をテーマとした山崎隆夫先生の講座では「教室が子どもたちにとって生きる場所、希望がもてる場所、輝ける場所になるようにして行きたい。」等の感想が、「身近なものを使って、算数のおもしろさを伝える話題を紹介し、その中にある数学的意味を考える」という内容の岡野恵司先生の講座では「指導する側が楽しくなければ、される側も楽しくないことがわかりました。かえって続きをします。」等の感想が寄せられました。



教員免許状更新講習

必修領域：「教育の最新事情」佐藤隆教授、市原学准教授、大島英樹立正大学准教授

文大だより

県民コミュニティーカレッジ講座

山梨県内の大学・短期大学とNPO法人「大学コンソーシアムやまなし」との共催事業として開講している県民コミュニティーカレッジの地域ベース講座を開講しました。

今年度は、「健康に役立つ音楽の不思議な力」と題して、本学初等教育学科・清水雅彦教授と音楽療法が専門の本学非常勤講師・青拓美先生が講座を担当しました。

10月5日（土）と10月19日（土）に計4回開催され、合計140名が参加しました。

普段の生活の中で音楽が耳に入ったとき、ふとむかしの思い出がよみがえったり、自然に気分が良くなったり、ちょびり悲しい気持ちになったりすることはないでしょうか？

このように、記憶や感覚にも結びついている音楽の不思議な力を生かしているのが、音楽療法の世界です。音楽療法の音楽には、才能も練習も必要ありません。その場で楽しむことが大切です。参加者からは、「実際に体験でき、楽しめました。音楽を通し、機能の向上等を楽しみながら生活に取り入れていけたらと思いました。」との感想をいただきました。

10月5日	第1回	講義：「音楽の不思議な力とは何か」 ～音楽は人間の身体と心にどのように働きかけるのか？～	講師：清水雅彦 青 拓美
	第2回	ワーク：「誰もが持っている楽器 声」 ～その磨き方と健康への意味～	講師：青 拓美
10月19日	第3回	講義とワーク：「誰もが持っている楽器 声」 ～その磨き方と健康への意味～	講師：青 拓美
	第4回	講義とワーク：「認知症と音楽療法」 ～歌うこと・奏でること～	講師：青 拓美

市民公開講座

昨年はオリンピック、そして、今年はロイヤルベイベーと、何かと耳にすることが多く感じるここ数年の『イギリス』という国名。でも、「イギリスのことをどれくらい知っていますか？」と問われると、うまく答えられない方が多いのではないのでしょうか？

昨年度は県民コミュニティーカレッジ講座として開催しました「British Culture(イギリスの文化)」講座は、今年度は、前半5回、後半5回、計10回の市民公開講座として開催しております。

講師の英文学科 ヘイミッシュ・ギリズ准教授が毎回の講座時にイギリスの紅茶とクッキーをご用意くださり、イギリス流の紅茶文化に触れながらのアットホームな雰囲気での講座として開催されている中、毎回20名以上の市民の方や学生が熱心に参加されています。



講座の様子

テーマ：イギリスの文化 (British Culture)

講師：本学英文学科准教授 Hamish Gillies (ヘイミッシュ ギリズ)

【前半】

- 第1回 9月30日（月） イギリス人の国民性について
- 第2回 10月7日（月） イギリスの伝統的な田舎生活について
- 第3回 10月21日（月） イギリスの都会生活（特にロンドン）について
- 第4回 10月28日（月） イギリスの伝統的な家や家族生活について
- 第5回 11月11日（月） イギリスの教育制度や立場や特徴について

【後半】

- 第6回 11月18日（月） イギリスの文学について
- 第7回 11月25日（月） イギリスのユーモアについて
- 第8回 12月2日（月） イギリスの階級制度について
- 第9回 12月9日（月） イギリスの王室について
- 第10回 12月16日（月） イギリスの伝統的なクリスマスやお正月について

文大だより

Welcome to Tsuru University!

パプアニューギニア大学学生との交流会開催！

10月18日（金）、「JENESYS2.0（外務省が主催し2007年から実施したJENESYSの後継として、アジア大洋州諸国及び地域との間で実施している青少年交流事業）」で来日中のパプアニューギニア大学学生20名と、留学・国際交流室からの呼びかけでボランティアスタッフとして参加してくれた本学学生25名の計45名が、文化体験や意見交換を通じて交流いたしました。

開催にあたっては、留学・国際交流室スタッフが企画・準備し、当日までに数回ボランティア学生とも打ち合わせを行いました。学生の相互交流が深まるようパートナーやグループを設定し、意見交換のトピックは学生が中心になって考えました。

当日、パプアのみなさまを大学入口でお出迎えした後、それぞれのパートナーと学食に向かいました。出会ったばかりの学生たちがすっかり打ち解け会話が弾む様子に、随行の通訳の方も驚かれたようです。早速連絡先の交換をしている姿も見受けられました。食後は4グループに分かれて賑やかにキャンパスツアーをし、交流会会場へ移動しました。

会場の3号館ホールでは、箏曲部の演奏を聴きながら好みの茶器と和菓子で日本茶をいただきました。その後、各大学の代表者が英語で相互に大学紹介を行いました。パプア学生からはパプアニューギニアの歴史や経済などについても紹介がありました。続く日本文化体験コーナーでは、華道、書道、折り紙、日本古来の遊び（けん玉や紙風船、あやとりなど）を楽しみ、グループディスカッションタイムには、カリフォルニア大学からの留学生も交え、「各国コミュニケーション事情」について熱く語り合いました。

最後はパプア学生によるパフォーマンスが披露されました。まず、パプアニューギニアの伝統的な民族衣装や地域性の違いなどの説明がありました。写真の女子学生が身に着けている腰蓑はバナナの木皮やタコの木で、帽子はポッサム（フクロギツネ）の毛皮で出来ているそうです。カラフルな衣装の女子学生らのダンスパフォーマンスの後、全員で輪になって掛け声とともに踊り、楽しいひと時を締めくくりました。

参加した学生からは、「貴重な出会いの機会となりました。いつかパプアニューギニアを訪れたいと思います」「ピジン語を教えてもらったり、Waipaと呼ばれる彼らの伝統舞踊と一緒に踊ることができ、都留にいながら異国情緒を味わうことができました」などといった声が聞かれました。今後もこのようなイベントを通じて異文化交流の輪が広がることを期待いたします。



全員で記念撮影



華道で異文化交流！

お詫びと訂正

都留文科大学報第122号に掲載した「ぶんだい堂」に誤りがございましたので、訂正するとともにお詫び申し上げます。

正 誤 表

ぶんだい堂		正	誤
渡辺豊博／編	背表紙	失敗しないNPOグラウンドワーク三島の20年とイギリスに学ぶ	失敗しないNPOグラウンドタワー三島の20年とイギリスに学ぶ

編集後記

広報という仕事

大森一輝

勤続20年目にして初めて広報委員になりました。当たり前のように手にしていた『大学案内』や『学報』の作成の大変さを実感し、これまで携わってこられた方々への感謝の気持ちを深めています。

新米委員として、私も少しでも貢献しようと、先日、北海道の高校主催の大学説明会に行ってきました。大学ごとに（写真のような）ブースを出して、高校生から質問を受けるという方式で、各大学がアピールに励みました。

驚いたのは、その規模です。全国から40もの大学、しかも、MARCH（明治・青学・立教・中央・法政）全部に、中部・関西からも南山・立命館クラスの私大、そして、東京外語大や遠くは高知大などの国立が、（失礼な言い方ではありますが）地方の一高校に駆けつけたのです。しかも、広報・入試担当部局の職員を中心に2～3人で来ていたところが多かったので、大学側の人数は全部で100人近くになりました。

自分が受験生だったウン十年前はもちろんです、10年くらい前でも、国立がここまでやるのは考えにくかったのではないのでしょうか。各大学ともこうした場での情報提供に非常に力を入れていて、ポスターを貼ったり、ビデオを見せたり、あの手この手で宣伝に励んでいました（学年ごとに1時間ずつで、計3時間）。

その点、本学は、いろんな意味で地味で、まだまだ改善の余地があるなあ、と思いつつ（本当は、「さあ、寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！東京に近い公立の大学だよ！留学制度も充実してるよ！」という感じで、呼び込みをしたかったのですが、やってもよさそうな雰囲気ではなく、逆効果になるかもしれないので、やめました）、ちらほらと寄って来てくれる高校生に『大学案内』その他を渡して、本学なりの魅力を力説したつもりですが、うまく伝わったかどうか、自信がありません。

広報の媒体を作るだけでなく、その前後、つまり、教育研究内容・学生支援体制を充実させる、それを高校生だけでなく広く社会に向けて継続的に発信することの大切さを、あらためて感じました。本学は、入学してくれた人の満足度は決して低くないと自負しています。学生・卒業生のみなさんも、積極的に自分の経験をまわりの人たちに伝えてもらえればと思います。



大学説明会

寄附

教育・学習支援のために

中野冬彦 様

10,000,000円

ありがとうございました。

本 ぶんだい堂



新保祐司 他／著
2013年6月
ぺりかん社 3,800円＋税
◇しんぼゆうじ 国文学科教授

日本思想史講座
4—近代